

連載

宇宙を観じる生活を！（４）

～黄華堂通信より～

黄華堂（代表 有本 淳一、メルマガ編集長 森谷 友由希）

「子どもたちに本物の星空を！」をモットーに関西を中心に観望会などの活動をしているボランティアグループ、黄華等が配信しているメルマガジン、『黄華堂通信』。星空案内、天文に関する絵本の紹介から研究従事者による研究紹介、はたまたクイズやメンバーの天文ルーツを辿る話題と、いろいろな話題を提供しています。ここでは連載でメルマガの話題をごくごく一部ですが紹介しています。

1. ガガーリンの飛行から50年 ～宇宙開発裏話

今から約50年前の1961年4月12日。人類初の人工衛星が上がってから4年もたたないうちに、一人の若者が宇宙飛行を成し遂げました。両生類が海から陸へと這い上がり、鳥が陸から空へ飛び上がったのと同じように、地球の生命が更なるフロンティアへ足を踏み入れた歴史的瞬間だったといえるでしょう。

そこで今回は宇宙に携わった人々が残した名言&迷言をちょびっと紹介！詳しく知りたい方は、ちょっと古い本ですが「宇宙はジョークでいっぱい」（角川文庫）がお勧めです。

【地球は青かった/ユーリ・ガガーリン】

公式記録では、ユーリは次のように話しました。

「地表を覆っている雲や、その雲の濃淡が大変よく見えます。

空の色は真っ暗です。この空を背景にして、星はなおさら輝かしく、くっきり浮かび上がって見えます。…空はやわらかい淡青色から、きわめてなだらかに、美しく、青に、藍に、すみれ色に、そして真っ黒な色に移り変わっ

ていきます。」

【僕にとっては…/ピート・コンラッド】

ニール・アームストロングが月面に降り立ったとき、

「一人の人間にとっては小さな一歩だが、人類にとっては偉大な飛躍である。」

と名言を残しました。

彼の後、アポロ12号で月を歩いたピートは次のような言葉を残しました。

「ニールにとっては小さな一歩だったかもしれないが、僕にとっては長い一歩だ！」

ピートはニールよりも背が低かったのです。

【納税者です/ヴェルナー・フォン・ブラウン】

ヴェルナーは液体ロケットの父。アポロ計画に湯水のごとく予算が注ぎ込まれていた当時、宇宙センターを訪れたおばさまが、ロケットの模型の脇にある、大きさを比較するための人形に気づきました。

「ロケットの横にあるこの小さな部品はなんですか？」

「一番大切な部品、『納税者』です。これがないと、ロケットは飛びません！」

【高い塔を建ててみなければ/川口淳一郎】

遠い星の探査を行うには、今までの技術に甘んじることなく、常に新しい技術を追い求めないとはいけません。はやぶさの川口リーダーは次のように語っています。

「高い塔を建てなければ、新たな水平線は見えてこない。」

（藤井大地、黄華堂通信 2011年4月号より）

2. 宇宙はただっ広い？ ～ホシノキラク： 黄華堂メンバーのルーツを辿って

子どものころから、なんだかよくわからないけど、なんとなく楽しそうで不思議な星や宇宙に惹かれていました。でも、知っているのはオリオン座と夏の大三角くらいで、ごくごく平均的な小学生でした。

そんな私が、天文の世界に踏み出すきっかけとなったのは、高校1年生の英語の授業中。（理科じゃないのかい！と声が聞こえてきそうですが・・・）大嫌いな英語の長文読解の教科書で扱われていたのは、天文学者による宇宙の広がりに関する話でした。

英語は嫌いだけど、話の内容がとにかく面白かったのです。数値はなんとなく知ってはいましたが、宇宙の広がりや頭の中でイメージでき、同時に途方もない気分になったのは、この時がはじめてでした。

そして、「そんなにすごいものなら、もっと知りたい！」と、天文の道にまずは進んでみようと思ったのでした。

もっと宇宙と関わってみたい、多くの人に感動を伝えたいという思いからいまだこの世界から足を洗えずにいます。とほほ。

頭の上も足元も同じ、広い広い宇宙の中です。晴れていたら、みなさんもぜひ夜空を見上げてみて下さいね。

（橋本末緒、黄華堂通信 2008 年 4 月号より）

3. 赤外線で見えた宇宙の姿 ～あなたの知らない宇宙

突然ですが宇宙の本当の姿をご存知でしょうか？

ハッブル宇宙望遠鏡のキレイな写真を見たことのある人は、遠い昔の宇宙の姿まで知っていると言うかもしれません。でも実は、これだけで宇宙の全てが分かったかと言うと、そうではありません…。

普段よく知っている目に見える光は、可視

光と言いますが、実はこの可視光では宇宙の恒星（太陽みたいに自ら輝く星）の光を主に見えています。つまり、ハッブル望遠鏡で撮られた遠く銀河のキレイな写真も、可視光の写真なので、基本的には星しか見ていないこととなります。

では、宇宙にある星以外の成分を見るには、どうすればいいのでしょうか？答えの1つとしては、可視光と違う波長の光で見るという方法があります。特に今回は、赤外線で見えた宇宙について少しお話します。

赤外線では一体何が見えるのでしょうか？実は、若い大きな星によって温められた宇宙の塵（ダスト）による光を見えています。つまり、宇宙の中の、既に輝いている星ではなくて、星が生まれている現場（星のゆりかご）を見ることができます。

この赤外線を使って宇宙を見るため、2009年の5月にハーシェル宇宙望遠鏡が打ち上げられました。この望遠鏡は、宇宙にある望遠鏡としては非常に大きく、口径3.5mもある大望遠鏡です。（ハッブル宇宙望遠鏡の口径は2.4m）ハーシェル望遠鏡の登場により、星の生まれる現場から、遠くの生まれだての銀河まで、これまで見るできなかった宇宙の姿が捉えられるようになってきました。

今後、ハーシェル望遠鏡の更なる活躍により、宇宙の新たな一面が理解されると思います。皆さんも、期待して下さいね！！

（住吉昌直、黄華堂通信 2011 年 3 月号より）

森谷 友由希